

## 韓国語訳『源氏物語』における巻名の訳し方について

李 芝善\*

### 〔論文要旨〕

『源氏物語』の韓国語訳には、一九七五年、柳呈訳による「世界文学全集」九十九巻（乙酉文化社）として出版された『겐지이야기（ゲンジイヤギ）』と、その後、二十四年の隔たりを経て訳された、一九九九年のナナム出版社による田溶新訳『겐지이야기（ゲンジイヤギ）一〜三』がある。——なお、本年（二〇〇七年）一月に金蘭周訳が出版されたが、原作からではなく瀬戸内寂聴の現代語訳からの翻訳であるので、ここでは取り扱わない。

二つの韓国語訳『源氏物語』における巻名の訳では、二つの訳本ともに二種類の方法をとっている。一つは、日本語の発音通りのもの、つまり日本語読みをハングルでそのまま表記したものと、もう一つは、日本語の意味をとって意訳したものである。日本語の音をそのままハングルで表記したものには「키리쓰보（キリツボ）」「하하키기（ハハキギ）」「우쓰세미（ウツセミ）」などがある。一方、日本語に当てはまる韓国語を用いて訳したものには、「夕顔」に対しては「박꽃（パッコオツ）」「매꽃（メコオツ）」、また「玉鬘」に対しては「옥다리（オッタリ）」「옥당굴（オットクル）」、「橋姫」に対しては「다리아씨（タリアシ）」「다리공주（タリコンジュ）」などがあるが、これらの巻名には、韓国語としても意味の不十分な訳になっていると同時に、原作とは全く意味の異なる訳になっているものが多数見られる。

『源氏物語』における巻名は、登場人物を象徴するものであって、そもそも由来のない巻名などなく、殆どが巻中の重要な和歌や重要な事件にちなんで巻名が付けられ、物語を導いていく大変重要な役割を担っている。

それにも拘わらず、韓国語訳の巻名が原作と異なり、登場人物の名前から人物像を想像することができない点は、同じ言語構造を持っている文化圏でありながら、韓国語と日本語の言語表現が違うからである。こういう点は、これからの日本文学の翻訳にも大変重要な問題となるに違いない。本稿では韓国語訳の善し悪しを問うのではなく、二つの韓国語訳本には巻名がどのように表現されているのかについて考察し、翻訳における如上問題を解決する糸口を掴みたいと考える。

\* いー・じそん、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程在学中、日本文学

## 一 はじめに

韓国における『源氏物語』訳には現在までのところ、柳呈訳と田溶新訳、金蘭周訳の三つがあるが、最初の韓国語訳は一九七五年、柳呈訳による『世界文学全集』第九十九卷（乙酉文化社）として出版された『겐지이야기(ゲンジイヤギ)』である<sup>(1)</sup>。その後、二十四年の隔たりを経て一九九九年、一般大衆をも視野に入れた田溶新訳による『겐지이야기(ゲンジイヤギ)』が訳される。親の跡を継いで子に譲るまでのほぼ三十年を一世代であるとするならば、この田溶新訳は一世代に近い年月を経た後、訳されたことになる。この二十四年間、韓国では経済・文化・政治などの各方面において、数多くの変化があった。

柳呈訳が出版された一九七〇年代は、経済的には「漢江の奇跡」と呼ばれるほどの経済発展の時期であったが、政治的には維新という暴圧と独裁の時代であったために、一般大衆にとっては犠牲の多い時代であった。こういう時期に生まれた『겐지이야기(源氏物語)』が一般大衆の目の届くところになかったことは、容易に想像つくであろう。

一方、田溶新訳が出版された一九九〇年代は、軍事独裁政権から民主主義へと移り変わった時期で、一九九八年には、今まで一部分において制限のあった日本大衆文化が全面的に開放され<sup>(2)</sup>、これをきっかけに大衆の日本に対する関心も高くなり、村上春樹を始め多くの日本文学作品が翻訳されるなど、日本文化が一般大衆の視野にも入るようになるのである。田溶新訳は、こういう時代的背景の中で生まれたもので、現在までのところ、二万部以上売れている<sup>(3)</sup>。そして、今年（二〇〇七年）の

一月にハンキル社より翻訳出版されたばかりの金蘭周訳は、瀬戸内寂聴の現代語訳を訳したものである。本稿では、『源氏物語』の原作を一切参考にしていない金蘭周訳は扱わないことにする。タイトルの「겐지(ゲンジ)」は「源氏」の日本語読み、「이야기(イヤギ)」は「物語」という意味である。これはおそらく、『源氏物語』の「源氏」が固有名詞であるため、日本語読みをそのまま使い、「物語」だけを韓国語に訳したものであろう。

韓国語訳のタイトルを見たら、源氏の話であるということが一目瞭然であるが、韓国人の誰もがすぐわかるのは、単語の意味だけではなく共通の感覚が働くからである。映画や本のタイトルを見て自然に目がいくのも、人の名前に親しみを感じるのも、共感できるものがあるからである。物体のない物に名前を付けて意味を付与しようとするところは、どこの国の人でも同じであるが、言葉に対する共通の感覚は、その国の人しか感じられないものである。翻訳の難しいところは、文化的な面も含めてまさにこういう語感の選び方にある。

翻訳とは、解釈を強調すると、訳者によっては原作とは別物になる可能性が高く、特に古典文学の翻訳をめぐってはそのやり方について翻案、完訳、全訳、抄訳、逐語訳、意訳、直訳、縮訳といった実に多くのやり方が存在している。例えば、韓国を舞台に、『源氏物語』を翻案した場合、源氏という登場人物の名前や作品の舞台などが全て韓国式の名前や地名に置き換えられ、韓国人にとっては、理解に苦しむ必要のないまさに韓国の『源氏物語』になってしまうのである。

日本語である「すし」が今や世界のどこへ行っても通じる言葉になっているように、同じ文化を共有している今の時代性や自国の文化である古典の持つ特殊性を考えると、解釈という側

面より文化を訳すという考え方が必要とされる。青木保が「文化の翻訳・翻訳の文化」<sup>(4)</sup>で「翻訳は、言語だけでなく文化全般にわたって行われる行為である」と述べている通り、翻訳は、言語が文化の所産である限り文化や社会を背景としながら生きるほかないのである。

特に、『源氏物語』のような登場人物の名前にそれぞれ由来があり、植物や動物の名前を巻名にしている特徴を持つ古典の翻訳は、井上英明が「翻訳の問題」<sup>(5)</sup>で『源氏物語』に対して各国の人々が思い描く内容はストーリー的には原作から大きく逸脱することはない。だが、原作における各巻の名称や作中人物、動・植・景物の呼称の訳などは各国語の共通理解が得にくく、勢い文学上の生命にかかわってくる」と言っている通り、日本固有の色が失われないようにするのは非常に難しく、訳のやり方によっては古典文学を殺すことになりかねない。こういった失敗は二つの訳本の中でも「夕顔」「玉鬘」巻だけを見てもわかるであろうが、意識の問題点とともに巻名の重要性が問われる。

そこで、本稿では日本固有の名詞を使用している巻名は、韓国の言葉でどこまで明確に表し得ているのか、韓国語訳『源氏物語』における「巻名」の表現形式について考察してみたい。

## 二 巻名の訳し方と問題点

韓国語と日本語は、文法が類似している点から翻訳しやすいという印象があるが、名詞や動詞の数などあらゆる品詞の数、つまり言葉の数によって、翻訳できない表現もある。例えば、風に関わる名詞を考えた場合、日本語には浦風、嵐、春風、秋

風などのように季節の風、東風、北風のように吹く方向によって違う風など、いくつかの風の種類がある。これらは、すべて韓国語で置き換えられる。

しかし、韓国語には日本語よりもさらに風に関わる名詞が数多く、韓国語にあつて日本語にないものがある。

例えば、「이스라바람(イ슬바람)」は、日本語で完全に直訳すると「이슬(露) + 바람(風)」、つまり「露風」と訳されるが、こういう名詞は、日本語では使わない。詩、随筆、小説のような文学書籍などによく見られるが、「東風」「海風」のように普通にある名詞以外に、「솔바람(そよそよ風、松風)」「선들·산들바람(そよそよ吹く柔らかい風)」「강바람(川風)」「물바람(水風)」「꽃바람(花風)」「빛바람(光風)」「꽃샘바람(コッセム風・花をねたむ風)」など、風の表現に関わる名詞は実に多様である。

これらの意味は、日本人には漢字から推測できるであろうが、逆に日本語の漢字をそのまま韓国で使うと、ほとんど漢字を使わなくなった韓国人には分からないのである。特に『源氏物語』のように、全ての巻名が漢字で表記されている古典作品は言うまでもない。

現在の韓国語は日本語の仮名に当たるハングルと漢字を使用している。しかし、韓国語がハングルだけであると思っている人も少なくない。これは、実際、使われている多くの単語が漢字語であるにもかかわらず、韓国は漢字語においても漢字表記ではないハングル表記を使用しているからである。韓国人の漢字使用の歴史は長く、漢字で表記しなくてもハングル表記だけでその単語の意味がわかる。また、漢字の使い方においても日本との大きな違いがある。日本が音読みと訓読みの両方を用い

原文の巻名	柳呈訳	柳訳の日本語訳	田溶新訳	田訳の日本語訳
梅枝	매화가지	梅枝	매화가지	梅枝
藤裏葉	등나무 속잎	藤の裏葉	등의 속잎	藤の裏葉
若菜上	풋나물 (상)	未熟な菜 (上)	봄나물 1	若菜 (春の菜) 1
若菜下	풋나물 (하)	未熟な菜 (下)	봄나물 2	若菜 (春の菜) 2
柏木	떡갈나무	柏木	떡갈나무	柏木
横笛	횡적	<b>横笛</b>	젓대	大琴
鈴虫	방울벌레	鈴虫	청귀뚜라미	青蟋蟀
夕霧	저녁안개	夕霧	저녁 안개	夕霧
御法	불법	仏法	불법	仏法
幻 (雲隠れ)	몽환 승천	夢幻 昇天	환상 자취를 감추다	幻想 (幻) 姿を隠す (跡を絶つ)
匂宮	니오우 친왕	<b>ニオウ親王</b>	내궁	<b>匂宮</b>
紅梅	홍매화	<b>紅梅花</b>	홍매	<b>紅梅</b>
竹河	댓내	竹の河 (川)	대의 내	竹の河 (川)
橋姫	다리공주	橋の姫	다리 아씨	橋のアッシ (若夫人)
椎本	잣밤나무 밑	椎の木の下 (本)	참나무 기둥	チャンナム (ブナ科に 属する榧柏・水榧など の総称) の柱
総角	고넨끈	毘 (紐などを結ぶとき 輪状にして結ぶ) に通 した紐	갈래머리	カルレ (一つの本から 二つ以上に分れ開い ている筋) 髪
早蕨	풋고사리	未熟な蕨 (早蕨)	햇고사리	未熟な蕨 (早蕨)
宿木	겨우살이	宿り木	겨우살이	宿り木
東屋	정자	東屋 (韓国語: 亭子)	정자	東屋 (韓国語: 亭子)
浮舟	우키후네	<b>ウキフネ</b>	뜬배	浮いている船
蜻蛉	하루살이	かげろう (生活や命が 極めて短いことのた とえ (虫))	하루살이	かげろう (生活や命が 極めて短いことのた とえ (虫))
手習	글씨 쓰기	字書き (習字)	습자	習字
夢浮橋	꿈의 부교	<b>夢の浮橋</b>	꿈속의 다리	夢の中の橋

【卷名対照表】

原文の巻名	柳呈訳	柳訳の日本語訳	田溶新訳	田訳の日本語訳
桐壺	키리쓰보	キリツボ	오동의 방	桐の部屋
帚木	하하키기	ハハキギ	비나무	箒木
空蟬	우쓰세미	ウツセミ	매미 허물	蟬の脱け殻
夕顔	박꽃	夕顔	메꽃	朝顔に近い花名
若紫	어린 무라사키	若いムラサキ	어린 보라	若い紫
未摘花	빨강꽃	赤い花	끝 따는 꽃	未を摘む花
紅葉賀	단풍놀이	紅葉狩り	단풍놀이	紅葉狩り
花宴	꽃잔치	花の宴	벚꽃잔치	桜の宴
葵	아오이	アオイ	접시꽃 축제	葵の祝祭
賢木	비쭈기	榊	비쭈기나무	榊木
花散里	꽃지는 마을	花の散る里	꽃지는 마을	花の散る里
須磨	스마	スマ	수마	スマ
明石	아카시	アカシ	명석	明石
濡標	물길잡이	濡つくし	수로 말뚝	水路の棒杭
蓬生	쑥밭	蓬畑・枯れ果てた地	우거진 쑥	生い茂った蓬
関屋	관문	関門	관문	関門
絵合	그림 겨루기	絵の争い	그림 시험	絵の試合
松風	솔바람	松風	솔바람	松風
薄雲	얇은 구름	薄い雲	얇은 구름	薄い雲
朝顔	나팔꽃	朝顔	나팔꽃	朝顔
少女	아가씨	アガシ (お嬢さん)	소녀	少女
玉鬘	옥덩굴	玉の蔓	옥 다리	玉の橋
初音	첫노래	初歌	첫울음	初泣き・初鳴き
胡蝶	호접	胡蝶	나비	蝶 (胡蝶)
螢	반딧불	螢火	반디	螢
常夏	패랭이	常夏 (唐撫子)	패랭이꽃	常夏 (唐撫子)
篝火	화투불	篝火	화투불	篝火
野分	찬바람	冷たい風	태풍	台風
行幸	행차	行幸 (御幸)	나들이	外出 (外歩き)
藤袴	등골나무	藤の木	난초	蘭
真木柱	노송나무	檜・真木	노송기둥	老松 (真木) の柱



使うのに対し、韓国は、音読みだけで読み、表記をしている。付け加えると、漢字の音読みだけを使っていることで、訓読みがないわけではない。

例えば、「山」という漢字に対し、日本は訓読みである「やま」と音読みである「さん」の両方を使うが、韓国は「やま」は意味として覚え、読む時には「さん」だけを使う。「青山」の場合、日本語では「あおやま」になるが、韓国の読み方は「チョンサン」となり、日本語の「せいさん」という読み方に当たる。つまり「さん」という漢字がなくてもこの言葉だけで意味が通じるのである。

韓国語訳の巻名にも「やま」のように漢字の訓読みをとったものもあれば、「さん」のように音だけを用いたものもある。

韓国語訳『源氏物語』の巻名訳では、二つの訳本ともに二種類のの方法をとっている。一つは、日本語の発音通りのもの、つまり日本語読みをハンゲルでそのまま表記した訳と、もう一つは、日本語の漢字の意味をとって意訳したものがある。

巻名対照表(ゴシック体のカタカナは日本語の音をそのまま、ゴシック体の漢字は韓国語の漢字の音読みをそのまま、それぞれ表記したもの)を見ればわかるように、日本語の音をそのままハンゲルで表記したものには「키리쓰보(キリツボ)」「하키기(ハハキギ)」「우쓰세미(ウツセミ)」などがある。

これらは日本語の音をそのままハンゲルで表記したもので、韓国語として意味を持っている名ではない。言い換えれば、韓国語の一般読者には注釈のない限り理解できないのである。

一方、日本語に当てはまる韓国語を用いて意訳したものには、夕顔に対しては「박꽃(パッコォツ)」「매꽃(メッコォツ)」、また末摘花に対しては「뽕꽃(パルガンコォツ)」「끝마는꽃(末

を摘む花)」、玉鬢に対しては「옥다리(オッタリ)」「옥덩굴(オットクル)」などがある。

日本語の音をそのままハンゲルで表記したものには注釈を付ければ簡単であるが、意訳したものは登場人物の命に関わる大きな問題が生じている。原作と完全に分れ、意味まで異なってくる訳もある。このような現象は、これらの巻名を次のように分けると、明確になってくる。

一、日本語の音をそのままハンゲルで表記したものと、二、日本語の漢字を韓国語の漢字の音読みにしたもの、三、日本語の漢字を韓国語の漢字の訓読みにし、組み合わせたもの、また、四、完全に韓国語で意訳したもの、最後に、五、漢字の韓国語の訓読みと日本語の音をそのまま用いたものの五つのパターンに分けられる(巻名は、帖の順に従う)。

(一) 日本語の音をそのまま表記した巻名

柳呈訳	田溶新訳
桐壺・帚木・空蟬・葵・須磨・明石・浮舟	須磨

(二) 漢字を音読みにした巻名 || 音読み + 音読み

柳呈訳	田溶新訳
胡蝶・横笛・紅梅	明石・少女・紅梅

(三) 漢字を訓読みにし、組み合わせさせた巻名Ⅱ訓読み+訓読み(ただし、訓読み+意訳、漢字の音読み+意訳は全て意訳と見なし除く)

柳呈訳	花宴・花散里・松風・薄雲・梅枝・藤裏葉・鈴虫・夕霧・御法・竹河
田溶新訳	帚木・末摘花・花散里・松風・薄雲・梅枝・藤裏葉・夕霧・御法・竹河・橋姫・浮舟

(四) 意訳した巻名(ただし、(二)のように音読みで訳された巻名は除く)

柳呈訳	夕顔・末摘花・紅葉賀・賢木・滯標・蓬生・閑屋・絵合・朝顔・少女・玉鬘・初音・螢・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・真木柱・若菜(上、下)・柏木・幻・橋姫・椎本・総角・早蕨・宿木・東屋・蜻蛉・手習・夢浮橋
田溶新訳	桐壺・空蟬・夕顔・若紫・紅葉賀・葵・賢木・滯標・蓬生・閑屋・絵合・朝顔・玉鬘・初音・螢・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・真木柱・若菜(1、2)・柏木・横笛・鈴虫・幻・匂宮・椎本・総角・早蕨・宿木・東屋・蜻蛉・手習・夢浮橋

(五) 韓国語の漢字の訓読みと日本語の音を用いた巻名

柳呈訳	田溶新訳
若紫・匂宮	該当なし

(二)のように日本語の音をそのまま表記した例を除いては、全てが韓国言葉になっている。それにもかかわらず、柳呈訳は五つのパターンに、田溶新訳は四つのパターンに分けられるほど、巻名の訳し方には統一性がなく、訳す際の基準も曖昧であることがわかる。

まず、(二)のように漢字の日本語読みになっている巻名に対しては、韓国語ではないため、柳呈訳も、田溶新訳も註を付けている。柳呈訳では、「桐壺」が「淑景舎の別称」で、「桐の木を植えたことから付けられた」巻名であることを認識し、意訳では通じないと考え、「源氏の生母」であるという註を付けて簡単に巻名を説明している。これに比べ、田溶新訳では、桐の部屋という訳に対し、意味の説明もそのまま日本語の読み方だけが書かれている。

基本的に二つの訳本には、全ての巻名に註が付けられているだけで、由来などが全部詳しく書かれているわけではない。日本語の音をそのまま表記する方法を用いるなら全ての巻に註を詳しく付けることが望まれる。そして、(二)の場合には、韓国が音読みだけで漢字を表記する点で問題はないが、読む側にとって漢字の意味に対する理解が必要となる。韓国語に該当する漢字語がない場合、漢字を知らないと意味は思い浮かばな

いであろう。仮に漢字を知っているとしても、「横笛」「明石」のように本来、韓国語に存在しない言葉であるなら、いくら漢字で書かれていても理解できないのである。韓国語で「명석(明石)」という言葉聞いた瞬間、韓国人は「明哲」という漢字を思い出すが、日本人は兵庫県明石市を思い出すであろう。「明石」は、「明石」の君にゆかりのある場所で、日本固有の地名であるため、京都を「고토(ギョト)」と日本語読みで表す(一)のような方法を取り、註を付ければ良いと考える。

また、(三)のように漢字の意味を取った訓読み+訓読みの場合は、「松風」と「夕霧」のように本来、存在している韓国語を除いては、辞書に載っていない言葉が創られている。つまり、一つ一つの漢字の意味をとった名詞+名詞の韓国語になつており、違和感のある新しい名詞が作られているのである。こういう翻訳は、言葉に新鮮さが感じられる点ではあり得るが、原作との距離が生じ、韓国人にも理解し難い訳になつている。

その代表的な例として田溶新訳の「橋姫」巻が挙げられる。

「橋姫」は、「橋(다리)」と「姫(아씨)」を韓国語の訓読みにし、「다리아씨(タリアッシ)」と訳している。つまり、漢字の意味だけが用いられ創られている。「다리(タリ)」とは「橋」「脚」を表す韓国語であり、「아씨(アッシ)」とは、両班の若い奥さん(夫人)に対してその従者が使う呼称で、漢字を借りては「阿氏」と書く場合もある。これでは、いくら漢字が書いてあったとしても、韓国人には、「橋」という名前を持つ夫人」というイメージしか浮かばないであろう。逆に、漢字を入れない訳になつていたら、「脚の綺麗な夫人」にしか感じられないであろう。これを避けるために柳呈は「橋(다리)」だけを訓読みに、「姫(공주)」は意訳をしている。「姫」という漢字が持つて

いる語感から「공주(コンジュ)」と訳していると思うが、しかし、柳呈訳も田溶新訳と同じようなことが言える。なぜなら「공주(コンジュ)」とは、プリンセスのことで、王女のことを言うが、韓国語の漢字「姫」の訓読みには、王女の意味はなく、田溶新訳と同様、「脚の綺麗なプリンセス」を連想させる違和感を与える訳になつているからである。

「橋姫」という巻名は、薰の歌「橋姫の心をくみて高瀬さす棹のしづくに袖ぞ濡れぬる」によるものであつて、宇治橋を守る女神のことを言う。これを考えると、韓国語訳では原作の持つ色とは違うイメージが創られている。

この「橋姫」を含め、(三)の「末摘花」「花散里」「竹河」「浮舟」などをも考えてみよう。まず、「末摘花」は、源氏が驚くほど醜い女性で、鼻が赤くて長く垂れ下がっているのが特徴的な人物である。こういう人物像を田溶新訳では、「끝마는꽃(クッタヌンコオツ)(末を摘む花)」と、直訳にしている。漢字があつても、韓国語では存在しない花であるため、植物であること以外、この花のイメージから人物を連想するのは無理である。一方、柳呈はバターン(四)の方法を取り、「빨간꽃(赤い花)」と訳している。末摘花は赤い花が咲く紅花の異称で、韓国語では「붉은꽃(イツコオツ)」と言う。「붉은꽃(イツコオツ)」という日本語に当たる韓国語がありながら、「빨간꽃(赤い花)」と訳したのは、末摘花の持つ人物像、赤い花や赤い鼻の持ち主であるイメージを活かすためであつたと思われる。

また、源氏の心が慰められる友達のような「花散里」という女性に対しては、両訳本とも「꽃지는마을(コオツジヌンマウル)(花の散る里)」と訳している。里や村の意味を持つ「마을(マウル)」という言葉があるため、普通の韓国人なら絶対人の



名前であると思えないであろう。今でも地方では、住所に「里」の音読み「리(リ)」を使うところもあって、この言葉からはどこか田舎の村が連想される。韓国ではまず人の名前にこの漢字を付けることはないからである。田溶新訳の「浮舟」も「花散里」と同じで、「浮いている舟」という訳になっており、人物の名とは思えない。

そして、「竹河」の巻名も二つの訳本ともに「竹の河」になっており、意味不明な韓国語になっている。柳呈訳は「대내(デネ)」と訳し、「竹(대)」+「入」+「河(내)」を組み合わせて作っている。「入」は「대」を強く言った言葉で、竹という意味は変わらない。田溶新訳は「대의 내(デアウネ)」と訳し、「竹(대)」+「の(의)」+「河(내)」を組み合わせて作っている。「의(ウ)」は、格助詞で日本語の格助詞「の」に当たる。二つの訳が意味不明な訳になっている点から、比喩的に「竹のような河」と考えられなくもないが、「竹河」は薫の歌「竹河のはしうち出でしひとふしに深き心の底は知りきや」によるもので、催馬楽の曲名のことである。

(三)の訳し方は、(二)のように、漢字の意味が分からない限り理解不可能になることや、漢字の使用が文に硬い印象を与えるので、それを避けるためには良いのである。しかし、「橋姫」を含め、今まで述べてきたように原作の持つ色彩とは完全にかげ離れてしまう危険性がある。従って、原作の色を失わないようにするためには、言葉から連想できる見出しが必要とされる。

(四)では、意識をしているため韓国語の辞書には載っていない新しい言葉が生まれている。韓国に存在している「松風」「夕霧」「蜻蛉」を除く固有名詞は、韓国語の一般辞書には載っていないが、普通の一般の人が使っている日韓辞書<sup>6)</sup>で探すと、

日本語から韓国語訳に対応して出てくるものは、次のようである。

帚木・空蟬・夕顔・若紫・葵・末摘花・賢木・関屋・絵合・  
 漂標・松風・朝顔・螢・常夏・篝火・行幸・藤裏葉・梅枝・  
 柏木・鈴虫・夕霧・御法・早蕨・宿木・東屋・蜻蛉・手習

この中にある名詞は、もともと韓国の漢字名詞としてある「松風」「夕霧」「蜻蛉」以外、全て翻訳された言葉であると言える。実際に、原作の巻名に相当する韓国語を辞書で探すとこれだけあるにも拘わらず、五つのパターンに分けて訳している。これは巻名が、韓国語に相当する単語の意味とは違う人物固有の名前であったためである。また、漢字の使い方や意味が両国において違うものもあるためである。

例えば、単純に「薄雲」を、薄くかかった雲という日本語の意味に合わせ韓国の漢字に置き換えると、淡雲になる。韓国での「薄」の使い方は、薄待、薄徳、薄利などで、「薄雲」という漢字名詞は使わない。「薄」を使わず「淡」という漢字を使う。「螢」は螢火あるいは螢光になり、「常夏」は「蓬」に、「椎本」の「椎」は、形が同じ漢字でも意味が完全に違う「棒」になるなど使い方が違うものもある。「椎本」の巻名は、薫君の歌「立ち寄らむ蔭と頼みし椎が本むなしき床になりけるかな」によるもので、「椎の木の下」の意である。原作では八宮をたとえるもので、巻名対照表を見ればわかるが、実際に柳呈訳では「椎」を「柏」の韓国語に、田溶新訳では「楢」に訳しており、原文の持つ漢字の意味と同じ訳になっている。本来、韓国語が持つ

「棒」の意味を避けるためにそれぞれ、柏と檜に訳したと考えられる。

新しい言葉が生まれるのは翻訳の特徴ではあるが、パターン(三)のような問題を含め様々な問題を生んでいる。

このような意訳は、金鍾徳の「韓国における『源氏物語』研究成果と課題照明」(2)で、登場人物を意識した場合、「登場人物のイメージは伝達できるが、読者は名前と自然景物を混沌する恐れがある」と指摘しているが、むしろ登場人物のイメージがまったく伝わらないのである。一番の問題は原作の巻名との関わりだけではなく、新しい言葉を生む過程で翻訳言語や被翻訳言語そのものが問われることである。意識することにより翻訳言語・被翻訳言語の正確な伝達は勿論、原文を活かす語彙の選び方が大変重要になってくる。それぞれの訳者によって全く別の物が生まれている。その代表的な例が「夕顔」「玉鬘」巻である。

### 三 意識と語彙の選び方

(二)のような、音読みだけの訳では、前にも述べたが、「桐壺」「空蟬」「夕顔」「玉鬘」「若紫」「末摘花」などのように、登場人物の名前が動植物名であることから、名前の由来について見出し文を付けるか注釈を付けない限り、音読みだけで人の名前であることはわからないのである。例えば、「夕顔」の場合は、前に述べた「다리야외(橋姫)」のように、漢字そのままだけでは「저녁얼굴(夕方の顔)」という意味になってしまう。また、漢字を一文ずつ音読みにしてハンゲルで表すなり、漢字一文から意味を取って組み合わせるなどの意識のパターンは、造

語になっている点で、読者の誤解を生む。訳者によって全く別の物が生まれている巻「夕顔」「玉鬘」の巻名を、巻名対照表を見ながら考えてみる。

まず、最初の韓国語訳である柳呈訳は「夕顔」を日本語の夕顔に相当する韓国語の「막꽃(パッコオツ)」と訳し、田溶新訳では朝顔に近い「메꽃(メコオツ)」に訳している。

「夕顔」巻の光源氏は八月十五日の夜、夕顔の宿に一夜を過ごした後、翌朝、夕顔をある廃院に連れ出すが、荒れ果てている所の不気味さにおびえる夕顔はその夜、急死してしまう。まさに夕方に咲き、朝になるとしぼんでしまう、植物の夕顔のイメージである。そういう彼女のイメージを「막꽃(夕顔)」「메꽃(朝顔に近い花)」という花の名に含意させることには無理がある。

『源氏物語』での植物、夕顔は、干瓢に製するもので、食用にも置物などにも用いるウリ科の蔓性一年草である。夏の夜に白い花が咲き、球形で大きい果実のなる植物で、韓国でも昔は田舎で普通に見られた花である。まさに柳呈がこの夕顔を「막꽃(パッコオツ)」としたのは間違ではない。

しかし、これは原作の登場人物とはかけ離れている。なぜなら韓国人には、「막꽃(パッコオツ)」は白というイメージはあるものの、むしろ故郷(田舎)を思い出させ、「메꽃(メコオツ)」には朝という共通感覚が働く。今は田舎でも滅多に見かけないため、「막꽃(パッコオツ)」と言ってもわからない人もいであろう。

一方、「메꽃(メコオツ)」と訳した田溶新訳は朝顔を意識して訳したと思われるが、それでも誤訳に近いのである。学名も種類も『源氏物語』の植物である夕顔ではないのである。

韓国でもハングルの名前には、花名を用いる場合がある。女の子の名前につけるが、その際には花という意味である「꽃(コオツ)」という字は使わない。花という漢字の音読み「ファ」という字を使う。これ以外、人の名前には動植物名などを用いる文化ではないため夕顔には花のイメージしかないのである。韓国語訳の翻訳の際にはこういった点に注意しなければならぬのである。

韓国の国立国語研究院編『標準国語大辞典』(8)によると、「박꽃」と「메꽃」の違いは次のようである。

박꽃 (パッコオツ)

여름에 흰꽃이 일겨드랑이에 한개씩 피는데, 저녁부터 피었다가 아침햇살이 나면 시든다. 원통 또는 둥근호박 모양의 커다란 액과로 긴 타원형씨가 있는데, 삼겹나 말려서 바가지를 만들고, 속은 먹는다. 인가의 담이나 지붕에 올라서 재배한다.

これを日本語に訳すと、「夏に白い花が葉の付け根に一枚ずつ咲くが、夕方に咲き、朝日がさすとしぼんでしまう。球形や丸い南瓜のような大きい液果で、長い楕円形の種があり、茹でるか、干すなどしてひさごを作るが、中身は食べる。人家の垣や屋根に這わせて栽培する」となる。まさに『源氏物語』の「夕顔」に当たる植物である。

これに比べ、「메꽃(メコオツ)」はピンク色の朝顔のような花の写真とともに、次のように書かれている。

메꽃 (メコオツ)

여름에 나팔꽃모양의 큰꽃이 낮에만 열은 붉은 색으로 피고, 저녁에 시든다. 뿌리줄기는 약용하거나, 어린잎과 함께 식용한다.

これを日本語に訳すと、「夏に、朝顔のような大きい花が昼にだけ薄赤く咲き、夕方にしぼむ。根つこと茎は薬用に使ったり、葉と一緒に食用にする」という意味で、原文の「夕顔」とは違う植物になっている。さらに、それぞれの学名とそれぞれを絵または写真(絵一参照)で示すとその違いは明らかである。

박꽃 (パッコオツ) (学名) *Lagenaria leucantha* Rusby var. *depressa* Makino

메꽃 (メコオツ) (学名) *Calystegia japonica* Choisy

つまり、田溶新訳では柳呈訳の「白い花の夕顔、夕方に咲き、朝にはしぼんでしまう」というイメージとは逆に「朝顔やピンク色の花、昼に咲き、夕方にしぼむ」のイメージで訳していることとなる。

同様に誤訳とも言えるのは、前に述べた「末摘花」、そしてこの「夕顔」巻だけではなく、「玉鬘」巻にも見られる。

「玉鬘」巻は、韓国語に「玉鬘」に該当する言葉がないため意訳になっているが、韓国語訳では韓国語の意味とも違う意味不明な訳になっている。柳呈訳では「옥덩굴(オットンクル)」、田溶新訳では「옥다리(オッタリ)」となっており、「玉鬘」とはまったく違う人物のイメージが創られているのである。

韓国語で、「玉(옥)」という言葉は美しいものを比喻する際

よく用いる言葉で、「玉のように光り輝き美しい」という意味が含まれている。「鬢(빈)」という韓国語は、日本語の「鬢」と違って、「귀밑머리(額の中心で髪を分け、後ろで一つに結んだ髪型)」（絵二参照）を示す。また、もし、漢字をそのまま韓国語の音読みにして「옥빈(玉鬢)」にした場合、「옥빈(玉鬢)」は「若くて美しい女性の顔」という原文とは違う意味になる。

田溶新訳の「옥다리(オッタリ)」の意味は、『標準国語大辞典』によると、「마로 썼을때에 두다리가 0차처럼 옥다리(まっすぐ立った時に両足が0型のように曲がった足)」という意味で、日本語「玉鬢」の「美しい鬢」の意味とは全く違う意味になっている。

「玉鬢」の巻名は、光源氏の歌「恋ひわたる身はそれなれど玉鬢いかなるぢを尋ね来つらむ」によるもので、美しい鬢、美しい葛草の意を持っている。

柳呈訳では「옥덩굴(オットンクル)」という言葉を用い、美しく長い鬢をイメージさせようとしており、原作の巻名の由来をも考えた訳になっている。おそらく、玉鬢の「美しい葛草」の意をもって訳したのであろう。この「옥(オツ、玉)」という言葉に、「덩굴(トンクル、葛)」が長く美しい鬢をあげた時のイメージと似ている点から「덩굴(植物の茎がぐるぐる巻いている状態)」という言葉を選んでい。ただ、玉鬢という人物の色を伝えるのには無理がある。

「옥덩굴(オットンクル)」は、まず、韓国語にない創られた言葉で、寶石に植物の葛を組み合わせた言葉であるため、共感を得ることは難しいのである。

すでに述べた通り、田溶新訳での「夕顔」「玉鬢」「橋姫」巻名のように誤訳とも言える語彙の選び方は、間違った文化理解

をも生む可能性がある。巻名の付け方において、田溶新訳のような誤訳を防いで、なるべく原作に近い古典色の濃い訳をするためには、巻名の由来を重視しなければならない。なぜなら原作『源氏物語』の巻名は、大きく三つのパターン(6)に分けられるが、由来のない巻名などないからである。殆どが巻中の重要な和歌によるもので、ほかに、重要な事件によるものが「紅葉賀」「花宴」「絵合」、重要な語句によるものが「桐壺」「蓬生」「関屋」「野分」「梅枝」「匂宮」「紅梅」「手習」「夢浮橋」である。

登場人物を象徴する大変重要な役割のある巻名は、パターン(四)のように訳すと、意訳であるため被翻訳言語が翻訳言語に勝てないのである。これは当然なことで、意訳には落とし穴があり、原作の性質が失われる可能性がある。

二つの韓国語訳からも明らかであるように、落とし穴にはまらないためには言葉の選び方が重要である。特に『源氏物語』のような古典には、語感選びが命である。

五十四帖のうち二つの訳本の巻名が全く同じである巻は、十一の巻にすぎない。

紅葉賀・須磨・関屋・松風・薄雲・朝顔・梅枝・夕霧・宿木・東屋・蜻蛉
-----------------------------------

これらの巻を除いては、二人の訳者よっての言葉選びは全部違う。

今まで述べてきた巻名以外にも、「初音」「藤袴」「行幸」「総角」を見てみよう。



まず、「初音」に対し、柳呈訳は「첫노래(チョンノレ)」と、田溶新訳は「첫소름(チョッソウルム)」と訳しているが、「첫노래(チョンノレ)」は「初(첫)」＋「歌(노래)」を、「첫소름(チョッソウルム)」は「初(첫)」＋「鳴きまたは泣き(소름)」を合わせた訳である。「初音」の巻名は明石の君の歌「年月をまつにひかれて経る人に今日鶯の初音きかせよ」によるもので、初めての鶯の鳴き声を意味するが、二つの訳本ともにこの原文の由来に沿って訳している。

次に、「藤袴」に対し、柳呈訳では「등골나무(ドンゴルナム)」、田溶新訳では「단초(ナンチョ)」と訳されているが、「등골나무」とは藤の木のことを、「단초」とは蘭のことを言う。藤袴は蘭の別名であるが、柳呈訳は夕霧の歌「同じ野の露にやつるる藤袴あはれはかけよかごとばかりも」の藤袴を、田溶新訳は蘭の別名の意味を以て訳したのである。

「行幸」に対しては、柳呈訳は「행차(ヘンチャ)」、田溶新訳は「나들이(ナドゥリ)」となっているが、「행차」は漢字で「行次」と書いて、年上が道を行くという意味になる。「나들이」はお出かけのことを言う。「行幸」は天皇がお出かけになることをいうが、「行幸」巻では、冷泉帝の大原野行幸をいう。両者ともにお出かけの意味を用いて訳している。

「総角」巻に対して、柳呈は「고넨근(コネンクン)」、田溶新は「갈래머리(カルレモリ)」と、総角の意味を以て訳している。「고넨근(コネンクン)」とは毘(紐などを結ぶとき輪状にして結ぶこと)に通じた紐を意味する。一方、田溶新訳の「갈래머리(カルレモリ)」とは、「갈래(一つの本から二つ以上に分かれ開いている筋)」＋「머리(髪)」のことで、髪を二つ以上に分けて後ろで編んで結んだ髪型を意味する。

総角はもともと少年の髪結び方で、飾りなどの紐の結び方でもあるが、柳呈は後者を以て、田溶新は前者を以て訳している。これで、同じ『源氏物語』の訳でも訳者によって、その語感選択の違いが明らかであるとわかる。

最後の(五)のパターンでは、「匂宮」のことを柳呈は、「니오우친왕(ニオウチンワン)(匂親王)」と訳し、田溶新は「내궁(ネグン)」と訳している。匂宮は皇族の一員で、今上帝の三の宮のことであるので、柳呈訳のように「匂」＋「親王」と、音読みと意訳にしても特に問題は生じない。しかし、田溶新訳は、韓国語としても、漢字の意味としても、全くわからない訳になっている。なぜなら「匂」という漢字は日本国字で、韓国にはないためである。さらに困るのは、「匂」という漢字が示されていて「내궁」と訳されているところである。語感を活かした言葉選びが必要である。

今までの五つのパターンの問題をなくし、『源氏物語』の各巻の名前の持つ色や雰囲気壊さないで訳すためには、どうすれば良いであろうか。

#### 四 おわりに

如何なる翻訳も原作より優れることは翻訳の姿ではない。『源氏物語』の紫式部が作り上げた登場人物のイメージを再現するためには、次の点に注目して訳すべきである。

原作で描かれている平安時代の情緒をも訳すためには、被翻訳言語である日本語を曲げてもらおうほかないのである。

(一) 巻名の由来(歌との関わり)



- (一) 人物を象徴する色  
 (二) 漢字を韓国語の音読みにした場合の意味の相違  
 (四) 漢字一文字の持つ意味と色彩

例えば、筆者が「夕顔」の巻名を韓国語に訳すとしたら、十九歳で急死した悲しく切ない愛を感じる女性である「夕顔」のイメージが感じられるように「하얀이슬같은 여인 유우가오」(白露のような女人 夕顔)にする。多少長くはなるが、今まで見てきたような五つのパターンから生じた問題を解決できる訳になると思われる。

「하얀이슬같은 여인 유우가오」(白露のような女人 夕顔)というのは、夕顔の愛称である。光源氏の歌「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」と夕顔の歌「寄りてこそそれかとも見めたそがれにほのぼの見つる花の夕顔」によつたものである。白く輝く露の「夜の間は、凝結されていたが、朝になると形が消えてしまう」、また、「弱々しく壊れやすい露」というイメージは、一夜の恋の後、急死してしまうはかなく切ない愛らしい夕顔のイメージを感じさせるに充分と言える。

「여인(女人)」という言葉は、大人の女性を表す古風な印象があるために選んだのである。そこに、人物の名前であることを明示するために「유우가오(ユウガオ)」という「夕顔」の日本語読みをそのままハンダ表記にした。柳呈訳と田溶新訳に比べて、人物の色を表し、動植物との紛らわしい点を避けられると思う。勿論、このような見出しとともに、「夕顔」の巻名には注釈を付け、巻名の由来など詳しく書くべきであろう。

翻訳で新しい言葉が創られている巻名の韓国語訳からもわかるように、異なる文化を共有するためにも、適切な語彙の選択

と言葉創りに恐れず、新しい言葉を生み出すことが翻訳者の使命である。

従って、名前の付け方においては、登場人物の具体的なイメージを再現することが一番重要であるが、そのために、訳者はそれぞれ登場する人物が如何に描かれているか、最後の最後まで見届ける文学的な心を持たなければならないのである。

【テキスト】

紫式部(一九七六)『源氏物語』(『新潮日本古典集成』新潮社)  
 柳呈(一九七五)『겐지이야기(源氏物語)』(『世界文学全集』第九十九巻、乙酉文化社)  
 田溶新(一九九九)『겐지이야기(源氏物語)』(全三巻、ナム出版)

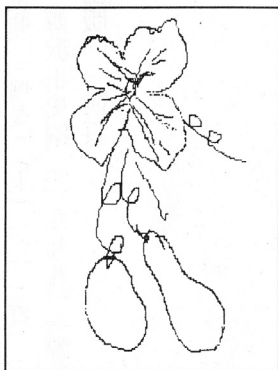
【注】

- (1) 金鍾徳(二〇〇二)「韓国における『源氏物語』の翻訳と研究——北京『源氏物語』国際会議」(『源氏研究』第七号、翰林書房)によると、「最初の柳呈訳は一九七五年、乙酉文化社による『世界文学全集』四、五巻」としているが、乙酉文化社に確かめたところ、金鍾徳の言う『世界文学全集』四、五巻は新訂版として出版されたもので、最初の訳本は同年の『世界文学全集』九十九巻であるということがわかった。
- (2) 韓国の「日本文化全面開放」に関する新聞記事を参照。  
 「매일경제(毎日経済)」(一九九八年一月三十一日)「주간한국(週刊韓国)」(二〇〇〇年七月一三日)。
- (3) 出版社に問い合わせたところ、「正確には教えられないが、現在まで二万部以上売れている」という。

- (4) 青木保(一九八〇)「文化の翻訳・翻訳の文化」(『文学』第四十八卷第十二号、岩波書店)。
- (5) 井上英明(一九九四)「翻訳の問題」(『国文学』第四十四卷第五号、学燈社)。
- (6) 安田吉実(一九八八)『エッセンス日韓辞典』民衆書林。  
梅棹忠夫ほか監修(一九八八)『日本語大辞典』第二版、講談社。
- (7) 金鍾徳(二〇〇五)「韓国における『源氏物語』研究成果と課題照明」(『日本学報』第六十二輯、韓国日本学会) 三七八頁。
- (8) 国立国語研究院編(一九九九)『標準国語大辞典』斗山東亜、「叫妥」(上) 二二二頁、「叫妥」(中) 二四三四頁。
- (9) 西沢正史編(一九九八)『源氏物語を知る事典』東京堂出版、一四頁。

【絵】  
著作権の問題により、筆者による絵と写真を添付する。正確な写真はヤン・チオルウ(一九九六)『韓国植物図鑑』の박꽃(五二〇頁)、메꽃(六五〇四頁)を参照。

박꽃 (パッコオン) *Lagenaria leucantha* Rusby var.  
*depressa* Makino



메꽃 (メッコオン) *Calystegia japonica* Choisy



【絵二】

著作権の問題により、筆者による絵を添付する。正確な絵は、  
国立国語研究院編（一九九九）『標準国語大辞典』（上）の七六  
一頁を参照。

귀밑머리（キミンモリ）

おでこの中心で分けて耳の後ろから結んだ髪



## 한국어역 『源氏物語』에 나타나는 卷名の 번역방법에 대해

이 지선

현재, 『源氏物語』에 대한 한국어 번역본은 1975년에 번역출판된 유정역 『겐지이야기』(『세계문학전집』 99권, 을유문화사)와 1999년에 번역출판된 전용신역 『겐지이야기』(나남출판사), 그리고, 2007년 1월에 번역출판된 김난주역이 있다.

본고에서는 세토우치작초의 현대어역만을 참고로 한 김난주역의 거론을 피하며, 원문을 참조로 한 유정과 전용신을 중심으로 살펴 보고자 한다.

두 번역본에 의한 卷名은 양쪽 모두 두 가지의 방법을 취하고 있는데, 하나는 일본어음을 한국어음으로 그대로 표기한 것(외래어식 표기)과 다른 한 가지는 일본어 명사를 해당되는 한국어로 의역한 것이 있다.

외래어식 표기에는 「기리쓰보」 「하하키기」 「우쓰세미」卷 등이 있고, 의역한 것에는 「夕顔」 「玉鬢」 「橋姫」卷 등이 있다.

역자인 유정과 전용신은 「夕顔」을 각각 「박꽃」 「매꽃」으로, 「玉鬢」을 「옥다리」 「옥덩굴」로, 「橋姫」를 「다리아씨」 「다리공주」로 의역하고 있는데, 이러한 卷名은 형태는 한국어지만 의미가 불충분한 역임과 동시에 원작과는 완전히 의미가 다른 역으로 되어있다.

『源氏物語』에 대한 卷名은, 등장인물을 상징하는 유래가 卷名마다 다 존재하는데, 대부분이 卷안에 있는 중요한 단가(短歌)에 의한 것이나 중요한 사건에 의한 것으로 결정되기 때문에, 이야기를 이끌어 가는 대단히 중요한 역할을 담당하고 있다.

그럼에도 불구하고 한국어역의 卷名이 원작과 달리, 등장인물의 이름에서 인물상을 상상할 수 없는 점은 같은 언어구조를 가진 문화권이지만, 한국어와 일본어의 표현구조가 다르기 때문이라고 할 수 있다. 그 언어표현구조는 앞으로의 일본문학번역에도 중요한 과제가 아닐 수 없다.

본고에서는 두 한국어 번역본에서의 卷名이 어떤 식으로 표현되고 있는지 고찰하여, 고전문학번역의 근본적인 문제해결의 실마리를 찾고자 한다.